

疎開先での思い出二題

星野 征男

坪 床

「つぼどこ」。懐かしい響きのことばである。

六十になった今でも、近所の庭の草木や我が家のベランダの鉢植えの前に立つと、脳裏を掠めることばである。

東京大空襲で焼け出されたのは、私が四歳の時である。当時の私は、私専用(?)の子守のおばさん

がいるくらいの比較的大きな和菓子屋の悴だった。

しかし、家を焼かれた私たちは両親の実家に近い新潟県小千谷市(当時は未だ市制は布かれていなかった)に疎開し、そこで母と死別したのが六歳の時であった。

そして私は二年生から六年生までの五年間、父方の親戚に預けられた。楽しくもあり、辛くもあり、淋しくもあった五年間である。

このような「時」を過ごした私ではあるが、幸いと言おうか、有り難いと言おうか、預けられた親戚の家が比較的大きな農家であったことである。

新潟県古志郡山古志村、ここが私が二年から六年生までの、まさに子ども時代の五年間を過ごした村である。一年の約三分の一は雪に閉ざされるような雪深い山の村である。それも昭和二十年代のことである。子どもの遊びといっても自然との関わりで遊ぶことしかなかった。そんな生活の中で、私が五年間継続的に熱中したのが「坪床・つぼどこ」いじりであった。

ところで、「坪床」といわれても、それがどんなものであるかお分りになる方は少ないかも知れない。

私の半坪（畳一枚）ほどの坪床は屋敷の西側の庭先に従兄たちのそれに並んであった。周囲を道端から拾ってきた丸みを帯びた大小さまざまの小石で囲

い、その石囲いに沿って赤、黄、白の花が咲く松葉ボタンを植えていた。その囲いの中に、咲いたときの花の色や背丈や葉の大きさなどを考えて草花を植えていく（格好よく配置していく）だけのものである。早い話、「自分専用の花壇」と言えば分かっていただけるかも知れない。

しかし、「坪床」ということばを「花壇」ということばに置き換えたのでは、私が子ども時代に熱中した「坪床いじり」の想い出には繋がらない。私にとっては、どうしても「つぼどこ」でなければなら



ないのである。

どうしてこんな年寄りみたことに熱中していたのだろうか。その答えは簡単である。それは、村の子どもたち（小中学生を問わず）がみんなやっていたからに他ならない。

村の大人たちの中には、傾斜している地形を生かして水を引いたり、大きな石を配している家もあり、子ども心に羨ましさと景観の見事さに感嘆したりもした。そのような家の草花を株分けしてもらったときなど、まるで宝物を扱うように自分の坪床に植えかえたものである。

私が自分の坪床に植えていた草花は、二十種類くらいだったと思う。今、名前を思い出せるのは、ギボシ、都忘れ、シャクヤク、玉菖蒲ぐらいである。

その頃は総ての草花の名前は勿論のこと、半坪ほど

の坪床のどの辺りに、何が芽を出すかまでほとんど分かっていた。

四月の雪解けを待つように黒く湿った土の中から、赤みを帯びたシャクヤクの芽や薄黄緑の都忘れの芽や白に近いようなギボシの芽がほんの少し出てきたのを見つけたときは、子ども心にいとおいさのようなものを感じたのを覚えている。屋敷の周りには家人が一年草の種も播いていたが、子どもたちが坪床に植える草花はほとんど多年草であった。

今の子どもたちが友達同志で野球選手のカードの交換をして蒐集するように、私たちは子ども同志で株分けをし合って自分の坪床の草花を殖やしていった。時には村の大人から株分けをしてもらうこともあった。そして、友達同志で坪床の「格好よさ」を自慢し合った。

中でも、私がこだわって集めていたのがギボシの

花に興味があつたわけではないが、あの葉の、緑と黄緑と白の何ともいえない模様が好きだった。

ギボシ（ウルイ）には、いろいろな品種がある。

葉の大きさ、葉の色、葉の模様など微妙にちがうものを集めて楽しんでいた。

時代と住んでいた環境が、今の子どもたちとあまりにも違い過ぎるが、このような子ども時代を過ごせたことに、ただ感謝するのみである。

縄を「なう」

二十四時間、眠りを知らない現代の都会生活では、「よなべ」などという、どこか哀愁と人間のぬくもりをふくんだ言葉はもう死語に近い。人によっては、昔の「よなべ」の時間帯に、「本業」の仕事に就いている場合もある。また、バブルが弾けたとはいえ、企業によっては、「残業」に次ぐ残業を強

いられているサラリーマンもまだまだ多い。「よなべ」は「夜業」と書くのだから文字通り夜間に仕事をすることである。したがって、「残業」は「夜業」であることには間違いない。しかし、「残業」という言葉からは「よなべ」のニオイはしてこない。

私が伯母の家に厄介になっていた小学生の頃、それは、もう五十年近くも前ということもあり、また、厄介になっていた家が農家だったということもあるが、夜業は子どもにとっても、極々日常的なことであった。

題名は忘れたが『母さんが夜業をして手袋編んでくれた……お父は土間で藁打ち仕事……』という歌がある。私が子どもの頃の情景そのものである。

当時の農家は、春から秋までの間は、昼は文字通り「猫の手も借りたい」という言葉がぴったりの忙しさであった。特に、稲の収穫期は、夜も昼の仕事

の延長線上の時間に過ぎないくらいの忙しさだったように記憶している。そして、子どもも一人の労働力として充てにされていた。しかし、三、四メートル、多いときには五メートル近い雪に覆われる冬場は、大人も藁仕事（筵織り、草履編み、器械縄ない等）や雪下ろしが日課となり、時間に追われる仕事はごく限られてくる。子どもたちの、冬場の昼間の仕事といえば、小さな子どもがいる家では子守があるくらいで、あとはスキーで遊ぶか炬燵の中で遊んでいることが多かった。

しかし、夕方五時から夕食までの時間と夕食後の一、二時間はそうはいかなかった。

夕食後三十分後くらいから、大人は勿論、子どもも、小学生にでもなっていれば全員が「縄ない」をするのが冬の毎日の夜業仕事であった。

囲炉裏のある居間で、座る場所も毎日ほとんど変

わらなかつた。一

人一把ずつの藁で

縄縄（ぞうなわ）

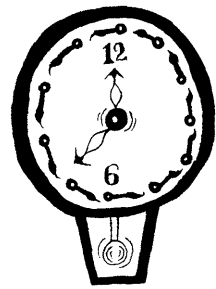
をなうのである。

しかし、住み込み

の若い衆と年長の

男衆は特殊な上等の細い縄をなうのが義務付けられていたように思う。

皆が夜業をしている時、家長である「つあーつあー」（その地方では父親をそう言っていた）は囲炉裏の横座に、どっかり座り煙管を啣えてお茶を飲んでいても、誰もがそれを不思議と思わない時代であった。また、「ふつかー」（その地方では母親をそう言っていた）は囲炉裏の薪を絶やさず案配よく焼（く）べているのが、夜業の時間の重要な仕事であった。二人共、家の要であることを存在そのもので示しているようであった。



子どもは大人の話聞きながら、そして大人は子どもの様子を探りながら縄をなっていた。夜業の間は子どもと大人の心を繋ぐ団欒の時間にもなっていたように思う。

このように、昔の農家における「よなべ」には、仕事はきつくても、現代の「残業」のように冷たい響きはなく、家族の連携やぬくもりを感じさせる語感をもっていた。

夕方五時頃から小一時間は、女衆は夕食の準備、男衆は家畜（牛や綿羊など）の世話と忙しい時間帯である。

子どもはこの間、夜業に使う藁を打っておくのが仕事であった。家族全員（十把ほど）の藁を目的に合わせて打っておかなければならない。

細い上等な縄用の藁は柔らかく打っておく。雑縄用の藁は固過ぎても柔らか過ぎてもいけない。小学生の私には結構、神経を使う仕事であった。そし

て、手抜きなどすれば、夜業の時間に怒鳴られるのは必至であるから、かなり丁寧にやった覚えがある。それがまた、一日や二日のことではない。冬の間、毎日のことである。

勿論、藁の打ちっ放しで仕事が終わる筈はなく、散らかった藁を掃除して、初めて夕食前の仕事が終わりになる。

今では、都会に限らず農家でも、「家の中から、子どもにさせる仕事が無くなった」といわれている。本当にそうだろうか。「よなべ」とまでは言わないが、母子で、父子で、また親子で一緒にやれる仕事はまだまだあるのではないだろうか。そんな一時が、親子のコミュニケーションの場になるように工夫できれば、「親子の心の断絶」などという言葉もかなり減ると思うがどうだろうか。

（日本女子大学・前お茶の水女子大学附属小学校）